



Title	エゾヒグマの捕獲時期と年齢構成
Author(s)	青井, 俊樹
Citation	北海道大学演習林試験年報, 3, 32-33
Issue Date	1986-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72682
Type	departmental bulletin paper
File Information	1984_1-16.pdf



I-16 エゾヒグマの捕獲時期と年齢構成

青 井 俊 樹 (天 塩)

はじめに —狩猟行政と狩猟期間—

狩猟行政の中で、狩猟規制に関するものの一つとして狩期の設定がある。本来それは狩猟の対象となる動物個体群に対して、狩猟の与える影響が最も少ないと思われる時期に設定するのが好ましいが、種々の条件から現実にはその点はあまり考慮されていない。しかしカモンカの例でもみられるように林業と野生動物のマネジメントの問題が我が国においても本格的にとりあげられるようになってきた現在、猟期設定のみならずは今後重要な課題となるであろう。そこで狩猟動物の一つとしてヒグマの捕獲時期が個体群に与える影響について、道北地方において現在までに得られた資料にもとづいて考えてみたい。

道北地方における捕獲実態

資料は、道北各所(調査範囲1万6,000 km²)において捕獲されたヒグマの頭骨を回収し、歯牙を用いて年齢査定を行うことにより収集した。なお'84年度の総捕獲数に対する回収率は96.5%であった。

北海道におけるヒグマの年間捕獲数(近年では300頭前後)の約70%が有害鳥獣駆除制度によるものである(北海道狩猟統計資料1984)。とりわけ道北地方はその割合が高く100%近くが駆除によると言ってもよい。そしてそのほとんどが4月・5月の残雪期に集中している。しかし駆除個体の大部分は、その有害性のためと言うよりは、スポーツハンティングの一形態としての捕獲と言える。すなわち正規の秋の猟期が残雪期に事実上持ち込まれた状況である。そこで道北では、春の捕獲時期とその内容が問題となってくる。その前に、一般に雪解けが早い年は、早くからクマが捕れると言われているが、融雪状況と捕獲時期との関連をみたのが表である。雪解けの状況と言っても一つの事例で説明することは困難である。そこでここでは、北大天塩地方演習林における過去5年間の、4月1日現在の積雪深及び最終消雪日と、初捕獲日との関係を見てみた。捕獲は穴グマ狩りはのぞき、すべて出グマの捕獲日である。'83年をのぞいて、4月1日の積雪、消雪日ともほぼ同様であることがわかる。しかし例年になく雪解けの早かった'83年と他の年とで捕獲日に著しい差があるとは認められなかった。いずれの年もおよそ4月初旬から中旬にかけて捕獲

表 北大天塩演習林における融雪状況とヒグマの初捕獲日

年 度	4月1日現在の積雪深	消 雪 日	初捕獲日
1981	70 cm	4. 23	4. 7
1982	80 cm	4. 26	4. 16
1983	56 cm	4. 10	4. 2
1984	89 cm	4. 24	4. 4
1985	82 cm	4. 22	3. 31

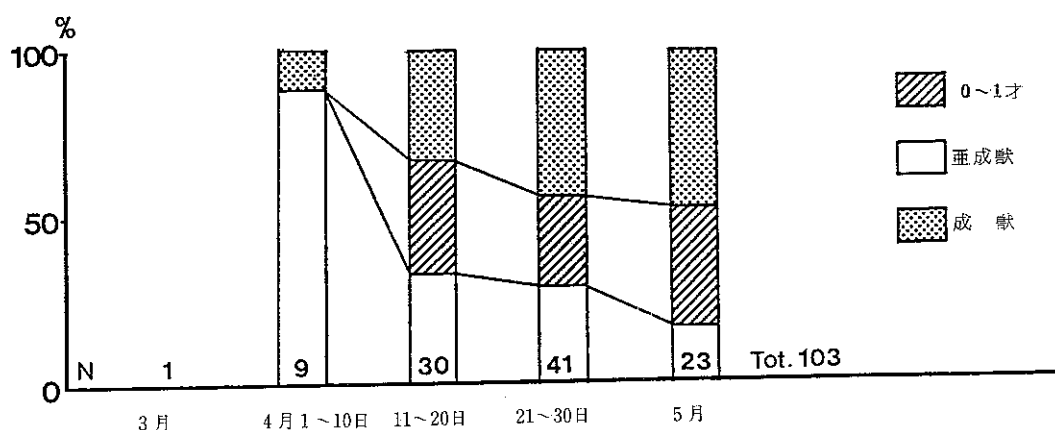


図 エゾヒグマの捕獲時期別年齢階層比 (道北 1975～1984)

され始めており、雪解けの状況とは大きな関連はないと思われた。次に捕獲日と捕獲された個体の年齢との関連を図に示す。それによると捕獲時期が早いほど2～4歳の亜成獣の割合が高いことがわかった。性成熟年齢に達した成獣は雪解けがすすむにつれて捕れ出し、5月に入ると半数近くが成獣となった。一方親子連れ(図では0歳と1歳)が捕れ出すのも4月中旬過ぎで、5月に入るとさらにその割合が高くなった。すなわち4月中旬以降も捕獲がおしすすめられるため、成獣、親子の割合が日を追って高まってくるというのが道北における一つの捕獲のパターンと言える。

個体群に大きなダメージを与えずに適度な狩猟を継続して行くためには、繁殖基盤に与える影響を極力少なくして行くのが一般に考えられる手段である。事実諸外国の多くの地域では親子連れのクマの捕獲が禁止されている。禁止されていない地域でも、妊娠メスや親子連れが早く冬眠に入る習性を利用して、狩猟期間を、これらの個体が冬眠に入る時期以降に設定している所もある。

今後我が国においても、ヒグマ個体群の保護管理を考える場合、繁殖基盤である成獣、親子が多く捕れ出す4月中旬以降は捕獲期間からはずすという策も、この結果からみる限り現実的な策と言えるかも知れない。